国際シンポ「古代東アジアの交流と留学生」2日間開催

東アジア世界史研究センター

「古代東アジア世界史と留学生」プロジェクトの本年度国際シンポジウム（社会知性開発研究センター／東アジア世界史研究センター＝荒木敏夫センター代表）が11月21、22の両日、神田キャンパスで行われ、あわせて350人が傾聴した。

東アジア世界史研究センターは「遣唐使・井真成墓誌」の発見の成果を土台にし、一遣唐使から中国への留学生に視点を広げることによって東アジア世界史のなかでの人的交流の意味を位置づけることを目的とするプロジェクトを立ち上げ、3年目を迎えた。

今シンポジウム「古代東アジアの交流と留学生」は、両日で以下の8氏が講演。それぞれディスカッションが行われ、遣隋使・遣唐使の果たした役割を探った。

▲ 講演する土屋教授

▽「遣唐使研究と東アジア史論」鈴木靖民・國學院大學教授▽「新羅の遣唐使と留学生」濱田耕策・九州大学教授▽「渤海の遣唐使」酒寄雅志・國學院大學栃木短期大学教授▽「遣隋・遣唐留学者とその役割」森公章・東洋大学教授

▽「7・8世紀の長安の考古学」王維坤・東アジア世界史研究センター客員研究員／西北大学国際文化交流学院副院長・教授▽「『胡化』『華化』と国際化」李浩・西北大学文学院長・教授▽「唐の道教をめぐる朝鮮と遣唐使」土屋昌明・東アジア世界史研究センター研究員／専修大学教授▽「遣隋使・遣唐使のもたらしたもの―様々な知識体系の将来―」田島公・東京大学史料編纂所教授

「テロとの闘い」強調

パキスタンのジャドマニ駐日大使が講演

▲ 講演するジャドマニ大使
右は通訳の広瀬崇子教授

駐日パキスタン大使のヌール・ムハマド・ジャドマニ氏を迎え、法学部学術講演会が11月25日、神田キャンパスで、学生、研究者ら150人が参加して開催された。

テーマは「パキスタンのテロとの闘い」。ジャドマニ大使はまず、determination という言葉を使い、「非常に大きな決意を持って、パキスタン国内でのすべての政党、軍、メディア、学者、市民社会が結束してイスラム武装勢力掃討作戦に臨んでいる」と語った。そのうえで、同国がテロの危険にさらされている背景や問題点と国際社会、特に日本への期待などを語り、会場からの多数の質問に答えた。通訳は、パキスタン情勢に詳しい広瀬崇子法学部教授が務めた。

ジャドマニ大使は、国際テロ組織が生まれた要因を挙げた。冷戦下の1979年、アフガニスタンに旧ソ連軍が侵攻し、10年にわたる戦闘が展開された。ソ連撤退後、内戦がぼっ発し、武装勢力タリバンが台頭。

「その要因は、社会的に崩壊したアフガニスタンを、国際社会は長い間『無関心』によって看過したことにある」と指摘した。

▲ 学生からの質問も活発だった

2001年の9・11同時多発テロ以降、米軍によってアフガニスタンのタリバン政権は崩壊したが、近年タリバンが復活。特に、アフガニスタンとの国境近くのパキスタン北西部・連邦直轄部族地域は、武装勢力の拠点であり、テロとの闘いの最前線となっている。

パキスタン政府は、武装勢力に対する「3D作戦」を展開。「dialogue＝対話」「deterrence＝抑止」「development＝開発」の各段階からなるテロとの闘いを展開している。

同大使は「本当の〝闘い〟は、hearts and minds の精神で人々の心をとらえること」とし、同政府が200万人にのぼるアフガニスタンからのテロ難民の救済に取り組んでいると語った。

また、長時間にわたる学生からの質問にていねいに答え、「日本のイメージは、ソフトでありスマートである」とし、パキスタンの開発に日本の支援を訴えた。

専修大学社会科学研究所創立60周年記念

檀国大学と第2回合同研究会

「世界同時不況下の日韓経済・企業システム」テーマに開催

今から80年前、NY証券取引所で株価の大暴落が起きた日と同じ10月24日に、社会科学研究所（以下、社研）は、創立60周年記念として檀国大学との第2回合同研究会を神田キャンパス・国際会議室で開催した。3月に社研は15年ぶりに実態調査を韓国で実施した折、第2回の研究会を本学で開催することが計画され、双方から2人の報告と2人のコメンテーターを出して「世界同時不況下の日韓経済・企業システム」のテーマで検討することとなった。

▲ 有意義なディスカッションが繰り広げられた

研究会は、町田俊彦所長（経済学部教授）のあいさつの後、Prof.Joo-Tae, Kim による報告「Stock Repurchase and Corporate Governance Reform in Korea An Actor-Centered Perspective」（コメンテーター：池本正純経営学教授）、Prof.Jong-Gon, Yang による報告「韓国企業の新しい跳躍：経営革新―Posco と三星SDI 事例を中心に―」（コメンテーター：佐藤康一郎経営学部講師）、宮嵜晃臣経済学部教授による報告「米主導のグローバル資本主義の終焉と日本経済」（コメンテーター：Prof.Jae-Hwa, Choi）、福島利夫経済学部教授による報告『日本的経営』の見直しと格差・貧困の諸相」（コメンテーター：Prof.Sang-Hyuk, Lim）をめぐってディスカッションが繰り広げられた。第3回は来年度檀国大学で開催されることが決定しており、今後とも活発な研究交流を続けていきたい。

公認会計士試験

本学から12人が合格

在学生は7人

11月26日、金融庁の公認会計士・監査審査会から、平成21年公認会計士試験の発表があり、12月3日現在、本学からは3年次生3人、4年次生4人を含む12人の合格が確認されている。うち11人がエクステンションセンター会計士講座在籍・出身者だった。＊合格者の詳細は次号に掲載します。

旧司法試験に本学から1人合格

平成21年度旧司法試験第二次試験の合格者が11月12日、法務省司法試験委員会から発表され、本学から1人が合格した。

今年度は1万5221人が受験し、合格者数は92人だった（前年度1444人）。合格率は0・6％。＊合格者の詳細は次号に掲載します。

最終講義のご案内

＜12月10日現在＞

学部学科に関係なくどなたでも参加できます。卒業生も奮ってご参加ください。

〇髙澤十四久経営学部教授
▷日時：1月7日（木）3時限▷場所：生田131号教室（1号館）▷テーマ：「バーナード理論と経営史―わたしの研究のあゆみを回顧し、今思うこと―」

〇ボレッタ，ウィリアム L. 文学部教授
▷日時：1月7日（木）2時限▷場所：生田10201号教室（10号館）
▷テーマ「英米 pop culture 論Ⅰ・Ⅱ」

〇林　義雄文学部教授
▷日時：1月13日（水）3時限▷場所：生田10202号教室（10号館）▷テーマ「日本語の歴史資料研究」

大学院商学研究科と東京信用保証協会が共同公開講座

中小企業の成長〝戦略〟がキーワード

11月28日、大学院商学研究科と東京信用保証協会の共同公開講座「中小企業の成長戦略」が神田キャンパスで開かれ、経営者、学生など約120人の参加があった。

講演では、伊藤和憲商学部教授が「戦略の作り方」をテーマに、ビジョンと戦略の策定・実行のマネジメントシステム「BSC（バランスト・スコアカード）」を用いての経営変革の実践例を紹介。ランスタッド㈱代表締役社長の小泉明正氏から「経営者の意思決定と成長戦略」について報告があった。

パネルディスカッションは上田和勇商学研究科長がコーディネーターとなり、伊藤教授、小泉氏に加え㈱イノーバ代表取締役社長の長田邦男氏が参加、企業経営のリスクマネジメントや中小企業経営の重要要因、中小企業が成功する戦略の方向性などで、活発に意見交換を行った＝写真。

専修人の新しい本

決算から見た生保業界の変貌

小藤康夫著

1997年に戦後初の生保破綻が起き、4年間で7社が消えていった。一時は落ち着いたかに見えたが、2008年にはリーマンショックの影響を受け、8社目が破綻した。

本書では繰り返される生保危機を冷静に観察しながら、生保会社が、近い将来、どのような方向へ向かっていくかを占う材料を提供している。そのアプローチとして、年度ごとに発表される主要生保の決算を客観的にながめながら、その年度の主要テーマを取り上げるスタイルを取っている。

厳しい経営環境に立たされた生保業界は、組織形態の変更などダイナミックな動きが予想される。（税務経理協会・本体2400円＋税）

著者（こふじ・やすお）＝商学部教授。担当は金融論、金融システム。

思春期・青年期の精神分析的アプローチ 出会いと心理臨床

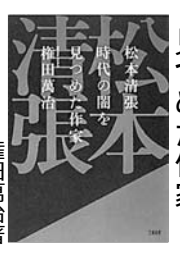
乾　吉佑著

40年におよぶ臨床経験の多くを費やしてきた思春期から青年期という「子どもでもない、大人でもない多感な年代」への精神分析的心理療法の実際をまとめた論集である。

短期療法や家族療法、親子並行面接法なども用いて、クライエントの状況やニーズに応じて幅広い心理療法で治療にあたった強迫性障害や、自閉症、境界性パーソナリティ障害などの疾患ベースのケーススタディ論文、学生相談や病院臨床といった多彩な臨床現場ベースの論文には、具体的な事例と技法が記されている。この世代特有の精神分析的な発達理論、精神病理論が掲載され、初学者から中堅の心理療法家にとって、学ぶべき点が多い1冊である。（遠見書房・本体3400円＋税）

著者（いぬい・よしすけ）＝文学部教授。臨床心理士。担当は臨床心理学。

松本清張 時代の闇を見つめた作家



権田萬治著

没後17年、生誕100年を迎え、今も多くの読者を魅了している松本清張。犯罪動機の社会性を重視した清張文学。最大の魅力は、反権力の視点で、空しく歴史に埋もれていく名もなき庶民への共感を表現した点。その原点は時代の変化の中でも人々の心をとらえ続けていると著者は語る。

本書では歴史小説、時代小説、現代小説、推理小説、現代史ノンフィクション、古代史研究と、それぞれに優れた業績を残した清張の広大な世界を、短編『天城越え』と川端康成の『伊豆の踊子』の比較に始まり、いくつもの名作に触れながら縦横に論じている。

終章では、未完の『神々の乱心』が、清張没後3年目に起きたオウム真理教事件の予言的作品になった可能性を記している。（文藝春秋・本体1524円＋税）

著者（ごんだ・まんじ）＝元文学部教授、ミステリー文学資料館館長